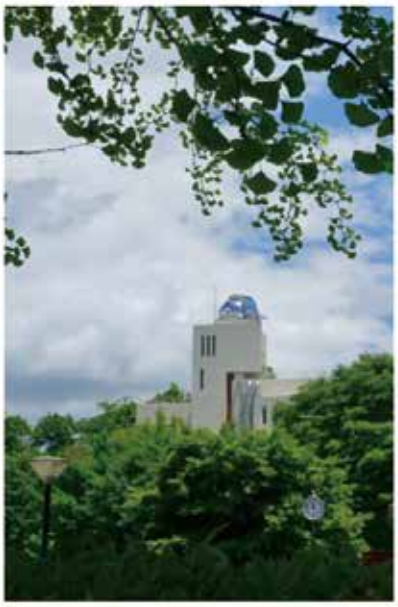
都留文科大學報

Vol.149
July. 2022

特集：新型コロナ禍における大学の対応

留学生受け入れ再開



提供：写真部

都留文科大学入学式／新副学長就任／新任教員紹介／学外研究報告／入試状況報告
昨年度の就職状況／学生による授業アンケート／文大だより／ぶんだい堂

TSURU University

都留文科大学入学式 —— 今年の入学者は840名

令和４年４月４日（月）、都の杜うぐいすホールにおいて、令和４年度都留文科大学入学式を開催いたしました。

式典は、新型コロナウイルス感染症の拡大防止対策のため規模を縮小し、入場者数を制限した上で開催しました。午前 10 時から行われた第一部では、学校教育学科・地域社会学科・国際教育学科・専攻科・編入生（初等教育学科・社会学科）、午後１時 30 分から行われた第二部では、国文学科･英文学科･比較文化学科・大学院・編入生（国文学科・英文学科・比較文化学科）を対象に行われました。

入学者の内訳は、教養学部：学校教育学科 201 名、地域社会学科 169 名、文学部:国文学科 134 名、英文学科 128 名、比較文化学科 126 名、国際教育学科 47 名、文学専攻科 3 名、大学院文学研究科 25 名、学部編入 7 名であり、合わせて 840 名の入学が認証されました。

新入生代表による挨拶では、国際教育学科の大津彩花さんが「今後の日本を背負っていく立場として、問題解決のための努力を重ね、社会に、世界に通用する教養と能力を身につけたい」と、比較文化学科の武田稜平さんが「新たな世界に一歩を踏み出し、

多くのことを経験し、学び、そして、それぞれの世界を豊かに広げていきたい」とそれぞれの決意を述べました。

昨年同様、コロナ禍の開催となった今年の式典では、会場周辺の各サークルや部活動などの新入生歓迎活動は自粛となりましたが、会場内は厳粛な雰囲気の中にも、大学生として新たな一歩を踏み出す決意と希望に満ちた空気に包まれていました。

学長挨拶

大学での学びと生活

都留文科大学　学長　藤田英典

この度、晴れて都留文科大学に入学なさったみなさん、おめでとうございます。都留文科大学の教職員を代表して、お祝い申し上げます。また、ご家族のみなさまにも、心よりお慶び申し上げます。

昨年度に続いて今年度も、コロナ禍での大学入試となりましたが、みなさんは、そうした状況下での受験という厳しい試練を乗り越えて合格し、都留文科大学に入学されました。その試練を乗り越えて今日の日を迎えられたことに敬意を表します。また、その厳しい試練を乗り越えてきただけに、喜びもひとしおであろうと推察いたします。

みなさんは、それぞれに、これからの都留文科大学での学びと生活について期待を膨らませていることでしょう。その期待に応えることができるよう、教職員もそれぞれに思いを新たにしていますが、、みなさんの期待通りや期待以上になるかどうかは、みなさんの心構えと努力による面があることも確かです。そこで以下では、これからの学びと生活において大切だと考えられることについて、相互に関連する三点に絞ってお話しします。

第一に、大学での学びと生活は高校までとはいくつかの点で重要な違いがありますが、特に注目すべきは、自由度が大幅に拡大するという事実と、既存の権威や偏見・思い込みなどに捕らわれることのない「自由な精神」の形成と発揮が期待されるということです。

小学校から高校までの授業では、教科書があり、基本的にはその内容を理解し、確立した「正しい知識」「正解のある知識」を習得していくことが中心でした。もちろん、その過程で、思考力・判断力や創造力を育むことも期待されますが、それらも含めて、学習の成果は、中間・期末の試験や入学試験で試されることになります。

こうした高校までの学習の在り方については、早くから批判もありましたが、近年は教育政策もアクティブ・ラーニング（AL）を推奨するようになっています。教師の講義を一方的に聞くという「受動的学習」ではなく、参加型の「能動的学習」や「主体的・対話的で深い学習」と言われるものが重視されるようになっています。高校の場合で言えば、今年度から実施される「新しい学習指導要領」では、教科「公民」の科目「現代社会」が新たな科目「公共」に変わり、しかも必修になりますが、その内容と方法はアクティブ・ラーニングを全面に打ち出し

たものになっています。

ともあれ、大学では、時間割はありますが、開講科目数が膨大で、それらは必修科目·選択必修科目·選択科目に分かれており、卒業に必要な単位数や教員免許などの取得に必要な単位数を充たすという条件の下に、各自が自分なりの時間割を作ることになります。したがって、受講時間も人によってまちまちですし、空き時間も生じることになります。

また、大半の科目では、教科書に相当するテキストはありますが、そのテキストと授業の構成·内容は、同種の科目であっても、教員や大学によって大きな違いがあります。私は一九六〇年代半ばに早稲田大学政治経済学部で経済学を専攻しましたが、例えば、金融論と貨幣論という科目があり、両者は基本的には同じ現象を扱っているのですが、前者は近代経済学のアプローチ、後者はマルクス経済学のアプローチに立つ内容でした。それほど極端ではないにしても、テキストや授業の担当教員によってアプローチや構成·内容にかなり大きな違いがあります。それ故に、テキストや講義の内容を受動的に受け入れ習得するのではなく、その妥当性·適切性や有効性を吟味し、自分なりに納得しつつ学んでいくことが重要だということになります。

第二は、教育と研究の関係についてです。具体的には、現代の大学の直接的な起源と目されてきた一八一〇年創設のフンボルト大学ベルリンの教育指針と見なされてきた「フンボルト理念」の意義についてです。この「フンボルト理念」については、二〇〇一年にチュービンゲン大学のパレチェク教授が〈史実に反する〉という内容の論文を公表して以来、日本でも、日本教育学会の学会誌『教育学研究』等において十年ほど議論が続いたのですが、それはともかく、同理念のエッセンスは、三つの側面での〈研究と教育の二重性〉という点にあります。

第１は、大学は研究機関であると同時に教育機関でもあるという二重性、第２は教授は研究者であると同時に教育者でもあるという二重性、そして第３は、〈学生も研究に親しむことを通じて学んでいく〉という二重性です。都留文科大学も、この三つの側面での〈研究と教育の二重性〉を重視しています。みなさんにとって第一義的に重要なのは、第３の〈学生も研究に親しむことを通じて学んでいく〉という点です。大学での教育は持続的な研究の成果に基づき更新されつつ行われるべきものであるから、学生はその研究成果を一方的に受け入れ学ぶのではなく、自らも探究者としてその研究成果を批判的に吟味し、疑問や問題を提起し、発展させていくことが期待されるということです。そのためにも、教室の内外で、テキストだけでなく、種々の関連図書を読み、教員や仲間と議論し、権威や先入観·偏見などに捕らわれることのない「自由な精神」を育みつつ、学んでいくことが重要だということです。

第三は、「知識基盤社会」と言われる現代において身に着けることが期待される学力·能力はどういうものかについてです。ここでは二つの観点から述べることにします。

二〇〇五年の中央教育審議会答申「我が国の高等教育の将来像」は冒頭で、「知識基盤社会(knowledge-based society)」という概念を提示し、「新しい知識·情報·技術が政治·経済·文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す社会」と定義しています。そして、第３章で「21 世紀型市民」の育成が重要だとしているのですが、その内容には踏み込んでいません。その内容は、三年後の二〇〇八年答申「学士課程教育の構築に向けて」において、四分野十二項目からなる「学士力」として明示されます。四分野の①は「知識·理解」、②は「汎用的技能」で情報コミュニケーション·スキル、数量的スキル、問題解決能力などです。この「汎用的技能」は欧米でも「ジェネリック·スキル」と言われ、大学教育の重要な内容とされています。

③は「態度·志向性」で自己管理力·チームワーク力·倫理観·社会的責任など、④は「総合的な学習経験と創造的思考力」です。加えて重要なことは、この二つの答申で、「何を教えるか」よりも「何ができるようになるか」に力点を置く教育にシフトすることが要請されたことです。そして、そのためにも次の二〇一二年答申「大学教育の質的転換」で、先ほど述べた「アクティブ·ラーニング（能動的学修）への転換」が明示され、現在に至っています。

もう一つは、二〇世紀半ば以降、「知」の構造転換が起こってきたことです。それまで自明視されてきた近代の「知」は一ここで「知」というのは知識の「知」ですが、個人、理性、事実·真実や合理性·機能性などを重視し、前提にしてきた近代の知とその知に基づく社会の在り方を問い直し再編する動きが台頭し拡大してきました。例えば、フェミニズムの台頭とジェンダー学の成立·展開や歴史研究における社会史·心性史の台頭は、比較的わかりやすい具体例でしょう。

フランスの哲学者リオタールの『ポストモダンの条件』（原著一九七九年刊·邦訳一九八六年）は、こうした「知」の構造転換を指摘した代表的な著作ですが、リオタールは同書その他において、科学技術による社会の「進歩」と、その「進歩」という観念に導かれた世界観·社会観·人間観を「大きな物語」と呼び、その「大きな物語」がラディカルに問い直され修正·再編される現代の状況を「ポストモダン」と呼びました。

このポストモダン的状況での近代的な知と社会の在り方の問い直しは、近年、さらに新たな段階に入っているとみることができます。例えば、二〇一五年の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための二〇三〇アジェンダ」に記載された SDGs（持続可能な開発目標）はその典型例と言えます。そし

て、それとも関連して当時一五歳のグレタ・トゥーンベリさんが二〇一七年にスウェーデン議会の前で演説し、さらに二〇一八年の国連気候変動会議で演説して以降、学生ストライキが毎週のように世界各地で行われることにもなりました。

もう一方で、二年前からの新型コロナウィルス感染症の世界的な拡大とその影響や、今年２月 24 日からのロシアのウクライナ侵攻は、二十世紀半ばまでに克服したかに思われてきた人類史上の二大惨事の再発・再来と見ることができる出来事です。その二大惨事とは、疫病と戦争です。

疫病については、代表的なものとして、1918 年から 20 年にかけて世界中で大流行したスペイン風邪パンデミックを挙げることができます。世界中で五億人が感染し、五千万人～一億人が死亡したとされています。新型コロナの感染者数と死者数はスペイン風邪ほどではありませんが、スペイン風邪パンデミックの当時は、現在ほどウィルス学が発展しておらず、感染防止の方法と体制も十分に確立されていなかったことを踏まえるなら、コロナ感染症も含めて、疫病への対応は人類にとって重大な課題であり続けるのだろうと思います。

戦争については、20 世紀の二つの世界大戦を踏まえて、両大戦の甚大な災禍に思いをいたし、国際連合を設立し、各国の主権の保障と平和の維持を誓い、国連憲章をはじめ種々の国際法を制定し、尊重・順守してきたはずです。しかるに、ロシアのウクライナ侵攻は、そのすべてを踏みにじり、ウクライナの主権を侵害し、同国の平和な日常を破壊し、主要都市を焦土化し、膨大な数の死者・負傷者と避難民をつくりだしています。疫病は、たとえパンデミックになっても、各国の政府・自治体や医療関係者や人びとの努力と協働により対応可能ですが、ロシアのウクライナへの軍事侵攻・侵略は、侵略される側にとっては理不尽極まりない事態であり、侵略する側の良識が回復されない限り、解決されない問題です。ウクライナに平和な日常が回復されることを願うすべての人々と連帯し、ロシア軍の速やかな撤退と正義にかなう適切な戦争終結を切に願いたいと思います。

疫病パンデミックや戦争といった、言わば有事の問題だけでなく、平時においても、私たちが、そして世界中の人びとが直面している問題・課題は多々あります。先に述べた地球環境問題はその一つです。また、21 世紀に入ってから改めて問題化するようになった貧困・格差や児童虐待やドメスティック・バイオレンスやハラスメントなども重大です。少子高齢化と都市化の進行に伴って問題化するようになった限界集落をはじめ、活力・魅力と暮らしやすさの低下が問題化している地域の再活性化も、重大な課題です。こうした問題や課題は、政治・行政の政策・施策や種々の支援はもちろん、学校・企業やＮＰＯも含む種々の機関・組織・団体と個々人の参加・協力・協働が相まってこそ、解決・改善が可能となるものです。

こういう時代にあって、みなさんには、困難な状況にある人びとや地域や国々に思いをいたし、共感し、その解決・改善に向けた取り組みに参加し協力・協働していく姿勢と能力・知性を育み豊かにしていくことが期待されます。この姿勢と能力・知性を私は〈共感し協働する知性〉と呼んでいます。この〈共感し協働する知性〉というフレーズを心に留め、学業に励んでいただければ幸いです。

最後に、都留文科大学での過ごし方について、簡単に述べておきます。都留文科大学の学生は、北は北海道から南は沖縄まで、全都道府県からほぼ人口規模に対応して入学されています。その約八割は、親元を離れて、都留市内、大学周辺のマンション・アパートや学生寮に住んでいます。広い意味で下宿生活をされているわけですが、その帰結として、時間的な自由度も非常に高いと言えます。小学校教員免許の取得や二種類以上の免許取得を目指す学生さんは、履修科目数も非常に多く、提出課題に費やす時間も多いと思いますし、授業料や生活費の一部を自分で稼ぐためにアルバイトにかなりの時間を割く学生さんも少なくないと思いますが、それでも、高校までとは違って、学生ならではの自由を満喫することができます。これは、自宅通学生の場合にも、程度の差はあれ、当てはまることです。大学生の特権と言ってもいいものです。

しかし、この特権と自由には責任が伴っています。特権は、享受することのできる特別の権利や利益と種々の義務の免除を内容とする概念です。具体的には、例えば、学割や、いろいろな場面で多少なりとも大目に見てもらえるとか、家族内での日常的な義務も免除される傾向にあります。他方、自由は、束縛・強制・義務からの自由と自らの意志に基づく選択・行為の容認・保障を内容とする概念です。こうした特権も自由も、学生という社会的地位に付与されているものですが、その特権・自由も地位も、学業に励み、健全かつ有為な社会人になるための準備期間として付与されるようになってきたものであり、その背後には、社会的な期待と親御さんをはじめとする家族の期待があります。したがって、みなさんには、その二重の期待に応える責任があります。

以上、縷々述べてきましたが、学生時代は、いま述べた自由を満喫することのできる時期であり、また、青春を謳歌することのできる時期でもあります。授業はもちろん、部活動・サークル活動・自治会活動・学園祭などの課外活動やアルバイトや友人と過ごす時間も含めて、仲間と切磋琢磨し、豊かな学生生活を過ごされることを期待して、式辞とさせていただきます。

新入生のことば

文学部　国際教育学科
新入生代表　大津　彩花

暖かな春の陽差しとともに、希望の蕾も膨らむこの佳き日に、伝統ある都留文科大学の入学式を迎えられたことを、大変嬉しく思います。私たちがこの場にいられるのも、母校の先生方の熱心なご指導や、家族の愛情、友人たちの励ましなど、多くの方々の支えのおかげです。そのことを心に留め、これから始まる大学生活を実りあるものにすべく、日々精進していきたいと思います。

今日ではグローバル化が一層進展し、さまざまな情報や製品のみならず、社会や地球環境にも大きな影響をもたらしました。

東日本大震災から十一年、今もなお悲しみや苦しみを抱えて生活している方々がいます。その後も日本、そして世界各地で大規模な災害が発生し、多くの命が失われています。さらに、一昨年からの新型コロナウイルスによるパンデミックは、尊い命とともに、これまでの当たり前の生活さえも奪いました。それでも乗り越えていこうと、この辛い状況の中を前向きに生き、誰かのためを想い、勇敢に闘っている方々の姿もあります。毎日を家族と過ごし、友人と学びを深めることのできることのありがたみを、改めて強く実感すると同時に、人と人との助け合い、支え合っていくことの大切さを学びました。

また、地球規模のコミュニケーションが国境を越えて交わされるようになり、発達した情報技術を通じて、遠い地の出来事も、すぐ近くの日常も知ることができるようになりました。今もどこかで起こっている辛い現実に、胸を痛めることも少なくありませんが、この混沌とした時代を私たちは生きていかなければなりません。現代社会には課題が山積しています。何を為すべきか、どのように生きていくべきか、常に考えることが必要だと思います。そして、今後の日本を背負っていく立場として、問題解決のための努力を重ね、社会に、世界に通用する教養と能力を身につけたいと思います。

都留文科大学には、全国各地から学生が集まります。私たちはそれぞれが持つ大きな夢や希望の実現に向けて努力を怠らず、大切な人たちと共に生活し、学ぶことのできる幸せな環境に感謝しながら、この四年間を過ごして参ります。また、勉学だけでなく、部活動やサークル活動などを通して、たくさんの人たちと交流を深め、互いに高め合える存在になりたいと思います。

そして、都留文科大学の学生として恥じることのないよう、また、社会に貢献できるよう、日々努めることをここに誓い、新入生のことばといたします。

新入生のことば

文学部　比較文化学科
新入生代表　武田　稜平

やわらかな風に包まれて、春の訪れが感じられるこの佳き日に、伝統ある都留文科大学の入学式に臨んで、大きな喜びを感じています。これも、母校の先生方のご指導、家族や友人たちの支えがあったからこそです。そのことを忘れずに、大学生活を有意義に過ごしていきたいと思います。

近年の日本社会を振り返ると、新型コロナウィルスの感染が拡大し始めてから、三年目になろうとしています。その間、国内だけでも、六百万人以上が感染し、三万人近い方が亡くなられました。その脅威は計り知れないものがあり、社会・経済に甚大な影響を及ぼしています。働き方はもちろん、旅行やイベント、私たちの学び方まで、世の中のすべての物事が影響を受け、少子化にも拍車が掛かっています。そうした中で、多くの方々がさまざまに工夫をしながら、この厳しい状況を乗り越えようと努力を続けています。私たちも、このような社会の変化に対応する力を身につけ、協力の輪をさらに広げていくことが必要だと思います。

広く世界に目を転じてみると、情報化・グローバル化が進み、人や物、情報が簡単に行き来することを可能にして、私たちの生活を豊かにしています。しかしその一方で、今、ウクライナ侵攻によって、世界の平和は危機的状況に直面しています。さまざまな報道を目にして、家族を失い、故郷を追われる方々の姿に、改めて戦争の恐ろしさに戦慄を覚えます。私たちも、この問題を他人事のように考えず、平和に生活できる日常に感謝し、自らに与えられた時間を大切に生きなければならないと思います。

このような混沌とした時代に、私たちは不安を抱えながらも、立ち向かっていかなければなりません。ここにいる仲間と共に、これからの大学生活の中で、社会の変化にしなやかに対応できる知識と教養を身につけ、課題を解決する力を培っていきたいと思います。

私たちには夢があります。希望があります。全国から学生が集まる、この都留文科大学の恵まれた環境で、新たな世界に一歩を踏み出し、多くのことを経験し、学び、そして、それぞれの世界を豊かに広げていきたい。勉学に励むことは勿論、部活動やサークル活動にも積極的に参加し、豊かな人間性を育んでいきたいと思います。

都留文科大学の学生として恥じることのないよう、また、未来の社会に貢献できるよう、自信と誇りを持って歩みを進めることを決意し、新入生のことばといたします。

「副学長」に就任して

新副学長　加 藤 敦 子

令和４年４月１日付で杉本光司前副学長の後任として副学長・理事に就任いたしました。どうぞよろしくお願いいたします。

令和２年・３年度の２年間、日本中の大学が新型コロナの対応に追われてきました。本学もまた未曾有の状況下で授業を実施し、学生・教職員の健康を守り、大学運営を継続する方策を模索してきました。その甲斐あって、感染状況が小康状態にある今年度は、履修者数の非常に多い一部の授業を除いて対面授業を行うことができています。部活やサークル活動なども学内外で行われ、キャンパスも活気を帯びてきました。予断は許さないものの、大学はかつての日常を取り戻しつつあります。

とは言え、社会全体がそうであるように、完全にコロナ前の元の状態に戻ることはなく、また、元の状態に戻ればよいというものでもありません。この２年間の経験は、大学の本質を改めて考える強力な動機と機会を与えてくれたと捉えるべきなのでしょう。

折しも、本学は昨年度「将来構想委員会」を立ち上げ、現代的課題に対応できる教育環境の構築を目指しています。令和５年度には６号館（仮称）校舎の使用を開始、令和６年度からは全学的に新たなカリキュラムを実施する予定です。そうした変革の時期の副学長・理事は、正直、私には荷の重い肩書なのですが、ふと私の研究分野である歌舞伎のことに思い至りました。先般市川海老蔵の市川團十郎白猿襲名披露が松竹歌舞伎会社から発表されたように、歌舞伎役者には襲名が付き物です。襲名においてはその名前に相応しい芸を備えていることが期待されますが、同時に、大きな名前を襲名することでその大名跡に相応しい役者に成長する、それが襲名のマジックだなどとも言われます。私も、目の前の問題から将来の課題まで一つ一つ誠実に対応することで「副学長」の責務を果たしていきたいと考えています。

蛇足ながら、私は本学初の女性副学長のようです。そのことに特別な意識はありませんし、ジェンダーの多様性が認知されつつある現代に女性だ男性だという二分法自体どうかとも思っています。一方で、本学では私が着任した平成25年（2013年）度に専任教員の女性比率が大学における女性教員比率の目標としてしばしばあげられる30％を越えていました。学科長、センター長、学長補佐といった重責を担う女性の先生方も少なくありません。今の私の立場はその延長線上にあるものです。特別なことではないけれど、これまでの女性の教職員の方々のご努力があってのものである、ということを心に留めておきたいとも思っています。

特集

新型コロナ禍における大学の対応（連載）

令和２年（2020 年）２月より日本でも感染が広がった新型コロナウイルス（COVID-19）の流行により、日本国内の大学においても入試、新学期開始などに大きな影響と変化が起こった。都留文科大学においても、３月よりさまざまな対応が断続的に起こっている。都留文科大学学報は大学の記録誌としての性格をもち、後世に対して「都留文科大学」を伝える役割がある。今事態は推移している中ではあるが、新型コロナウイルスへの対応を後日振り返るための記録として、特集を組みたいと思う。新興感染症の流行は長ければ数年にわたるもの（スペイン風邪では２年～３年）であり、本特集は著者を変えて今後断続的に報告をおこないたい。

交換留学生受け入れの再開について

国際交流センター長　茂木秀昭

2020 年から２年間、コロナ禍により停止していた留学生の受け入れが、政府の入国制限緩和により、ようやく再開することができました。昨秋より欧米や韓国への本学からの留学生派遣は再開していましたが、受け入れは不可能というアンバランスな状態が続いていただけに、待ちに待った交換留学生受け入れとなりました。

４月の新学期より、ヨーロッパの交換留学協定校から７名（フランス２名、イギリス１名、スペイン１名、北欧３名）とアジア圏協定校（韓国２名、中国１名）（上海外国語大学の学生は上海ロックダウンのために日本に来られなかった）の留学生を受け入れることができました。彼らの中には、１年半ずっと来日を待ちわびて、日本の外務大臣に嘆願書を送った学生もいました。

留学生たちは、４月５日には学長室を訪問。一人一人が日本語で自己紹介をし、藤田学長、田中副学長、加藤副学長から激励を受けました。また、本学がいち早く留学生の受け入れ再開を行ったニュースは、山梨日日新聞と読売新聞山梨版でも取り上げられました。

学長訪問の様子

留学生をサポートするチューター活動も、保健センターの指導を受けつつ徐々に再開をしています。また、一部の留学生はスチューデント・アシスタントとして語学教育センターの授業に参加をしており、本学の学生との交流も広がっています。

留学生たちは、交換留学派遣学生募集オリエンテーションにも参加し、本学の留学希望者たちに母国のことや在籍大学のことを紹介してくれました。これまで、書道や生け花等の日本文化を体験しましたが、今後、茶道、座禅、百人一首などの文化体験も予定されています。今秋からは更に多くの交換留学生が来学の予定であり、学内での一層の国際交流が期待されます。

書道体験の様子

留学生紹介

Q.1 出身国　Q.2 在籍大学　Q.3 都留文科大学で学びたいこと
Q.4 日本や都留についての印象　Q.5 好きな食べ物
Q.6 ツルブン学生へ一言

キムローズ・ウィロー・アキ
Aki, Kym-rose Willow

A.1 イギリス

A.2 オックスフォードブルックス大学

A.3 都留文科大学を選んだ一番の理由は、田舎にあることでした。英語を話せる人が少ない場所で、どっぷり浸かってみたいと思ったからです。　田舎の落ち着いた環境で、勉強することで自分のやりたいことに集中できます。

A.4 日本に来てから、私は非常に幸せです。国境閉鎖のために日本に入国するのを待つのは、私にとってとても苦痛なことでした。日本や都留市について、希望や夢を持ちすぎてしまったのではないかと心配になりました。しかし、入国後、日本と都留市は、私が期待していた通り、それ以上のものでした。長い間待っていた自分の人生を歩み続けることができて、本当にうれしいです。そして、ここに慣れてくれるように助けてくれたすべての人に感謝しています。日本も都留市も思っていた通り美しく、今この瞬間にここで生活していることが本当に幸せです。

A.5 本当に一つだけ選べません。
出身国：ローストディナーやトード・イン・ザ・ホールなど
日　本：全国には、新潟県のタレカツ丼です。都留市には、三ツ星マートのガーリック枝豆です。

A.6 私は、都留文科大学での生活が本当に好きになりました。その理由の一つは、ここにいる他の素敵な学生たちのおかげです。こんなに歓迎してくれる皆さんに感謝したいです。辛抱強く付き合ってくれてありがとうございます。いつも新しいことを教えてくれてありがとうございます。私と仲良くしてくれた皆さん、本当にありがとうございます。

バライエ・ヨアン
Barraille Yohann

A.1 フランス

A.2 トゥールーズ・ジャン・ジョレス大学

A.3 日本の教育と文化

A.4 都留市はとても静かで、きれいな景色がたくさんあって驚きました

A.5 出身国：Confit de Canard（鴨コンフィ）
日　本：全部（一番目はラーメン）

A.6 私は怖くないので、一緒に話したり、遊んだりしましょう！

イチアル・ハラミヨ・ゴンザレス
Itziar Jaramillo González

A.1 スペイン、アリカンテ

A.2 サラマンカ大学

A.3 日本語が上手になりたい

A.4 今年はよくがんばりたいと思います。日本語をわかるようになりたいです。

A.5 出身国：チュロスとパエリア
日　本：すし！

A.6 都留大学のおかげで、特別な瞬間を過ごせるようになりたいです。

ブリズ キリアン
Briseux, Kilian

A.1 フランス

A.2 トゥールーズ・ジャン・ジョレス大学

A.3 日本語と文化

A.4 ほんとに文化的で安全で未来的な国

A.5 出身国：バゲット
日　本：御寿司

A.6 みなさんと友達になりたいので、安心して話しかけてください:)

チョウシュク／張淑

A.1 中国

A.2 湖南師範大学

A.3 1、日本語の口頭発表の仕方
2、日本語の論文の書き方

A.4 日本にくる前、日本人はみんな公の場合で静かだという逸話を聞いたことがある。でも、初めて日本の高速バスに乗ったとき、隣りの日本人の女子たちはずっとわいわいとしゃべっていて、ちょっと驚いた。

A.5 出身国：ライフヌードル（米粉）
日　本：和菓子

A.6 アニメについてのサークルに入りたい！

ノヒョンテ／盧　鉉太

A.1 韓国

A.2 韓国外国語大学

A.3 日本語教育、国際教育を学びたいと思います。

A.4 噂通り外国人留学生への関心と支援が多くて、文大に来てよかったと思いました。

A.5 出身国：韓国風マーラータン
日　本：ちりめん山椒

A.6 みんな親切にしてくださってありがとうございます！

イチャンベ／李　昌培

A.1 韓国

A.2 韓国外国語大学

A.3 日本語と日本歴史と日本文化

A.4 日本のコンビニで何もできるというのが驚きました。東京は本当にステキな都市だと思います。また、新幹線に乗りました。新幹線の速さは信じられないほど速かったです。

A.5 出身国：冷麺
日　本：ラーメン

A.6 ツルブンは本当にいい施設の学校です。うらやましいです。

ヘルストロム　オールヴ，オーロラ
Hellström Orlov, Aurora

A.1 スウェーデン

A.2 ウプサラ大学

A.3 日本の文化はどこが違うのか、また日本の歴史についても学びたいです。

A.4 都留市は自然豊かな街で気に入っています。また都留文科大学のサイズ感も勉強するのには最適です。お土産、居酒屋、コンビニ、歴史のある都市や建造物などの日本文化に興味があります。日本では低価格で外食が出来ることに驚きました。また 24 時間営業のコンビニやいつでも飲み物が買える自動販売機の便利さに驚いています。

A.5 スウェーデン料理では人参とショウガのスープが大好きです。スウェーデンのヴェステルボッテン地方で作られたチーズを使ったパイ västerbotten-pie や甘エビをトーストにのせたトーストスカーゲン toast skagen も好きです。日本料理ではお刺身とうどんが大好きです。

A.6 Keep being amazing!

ダッドカニ，アルマン
Dadkani, Arman

A.1 スウェーデン

A.2 ウプサラ大学

A.3 せっかく日本に留学している以上は日本語や日本社会などについて学びたいです。あと、勉学ではないかもしれませんが部活にも活発に参加できれば幸せだと思います。

A.4 都留市に来た時にちょうど春の花が咲いていて、ごく短い間でしたが少しだけでもお花見に行けたことが本当に良かったです。また、その短い時期で拝見できた桜は素晴らしかったです。　キャンパスはすごく居心地が良く、とても快適に勉強できるスペースだと気に入っています。

A.5 日本で一番好きな食べ物は焼肉定食か唐揚げ定食です。
スウェーデンで一番好きな食べ物はハンバーガーです。理由は普通においしいからです。

A.6 若いうちに遊びまくるのだ、学生たちよ。

デ　ヴォルダー，ナタン
De Valder，Natan

A.1　ベルギー

A.2　VIVES

A.3　多文化を学ぶことが好きなのでずっと日本に来たかったです。都留文科大学は日本各地から学生が集まっているので本当の「日本」について学ぶことが出来る環境だと思います。将来、ここで学んだ「世界共通の認識や文化」「日本独特の認識や文化」を生かし、ベルギーで様々なバックグラウンドを持った人々のサポートが出来るようになりたいです。

A.4　山や自然、静かな環境が好きなので都留市を気に入っています。特に夜散歩をするのが大好きです。日本に来て驚いたのは居酒屋が早く閉まることです。

A.5　ベルギーで一番好きな食べ物はフレンチフライが添えられた boulette（ミートボール）です。これはベルギーではファストフードで、週末の始まりや旅行から帰ってきたり、疲れた日などに食べることが多いです。日本食で一番好きなのはうどんです。何種類か食べましたが中でもカレーうどんが大好きです。

A.6　日本人の多くが自分たちは英語が上手ではないと言います。また自信がないからなのか、とても消極的に英語を話しています。ベルギーにいた時も日本人は英語を話すのが苦手だと聞かされていました。でも日本に来て都留文科大学生の英語力が高いことに驚きました。多くの学生が問題なく英語で会話が出来ると信じています。学生には「恥ずかしがっている時間はない！自分を信じて！ Believe in yourself, life is to short for being shy!」と言いたいです。

チューター・バディ学生紹介

吉田　玲香
（文学部英文学科）

Q.1　なぜチューターになったのか

A.1　中学生の頃から国際交流に非常に興味があり、様々な活動に参加してきました。チューター制度は今までの経験を活かすことができる非常に良い機会だと思い、入学前から参加しようと決めていました。そして、チューター制度を通して、世界中に友達を作りたいと思いました。

Q.2　留学生受け入れができるようになったことについて

A.2　1年生の頃から約2年間、留学生が来ることを待っていました。そして今年、念願のチューターになれると聞いたときは、本当に嬉しかったです。留学生が都留に到着した時には、市役所の手続きに一緒に行ったり、スーパーを案内したりしました。留学生にとって、チューターは「初めてできた日本のお友達」だと思います。今では、プライベートのこともたくさん話したり、冗談を言い合ったりするくらい、親しく、大切な友達です。国境を越えて、世界中に友達ができ、「何年後かに集まるときはどこで集まろうか?」という話もします。毎日が充実していて、チューターになれたことには感謝の気持ちでいっぱいです。

Q.3　今後の意気込み

A.3　8月から交換留学生としてアメリカへ1年間留学します。チューターで学んだこと、得た経験を活かし、現地でも様々な人と関わり、将来は日本とアメリカの架け橋となるような存在になりたいです。そして、今後もより一層、都留文科大学の国際交流活動が活性化できるように努めていきたいです。

仲原　真帆
（文学部国際教育学科）

Q.1　なぜバディになったのか

A.1　コロナ禍でずっと停止していた国際交流がようやく再開できることになり、この機会を逃してはいけないと思いました。もともと文化交流や他国の人々と価値観や考え方の違いを共有することが好きなので、留学生のバディになってできるだけたくさん交流する機会を増やしたいと思ってメンバーになりました。

Q.2　留学生受け入れができるようになったことについて

A.2　ずっと待ち望んでいた、留学生との交流ができると聞いたときは本当に嬉しかったです。そして、たくさん日本のことを教えて相手の国のこともたくさん聞きたいと思い、留学生の到着をワクワクしながら待っていました。実際に留学生と交流してみると、出身国によって考え方も価値観も全然違うということがわかり、話すたびに良い影響を受けています。また、留学生との交流が始まってから他の学生との交流も生まれたりして、新しい出会いもたくさんありました。留学生との交流が異文化交流だけでなく、新しい仲間との出会いの機会にもなっていてとても楽しいです。

Q.3　今後の意気込み

A.3　身近に外国から来た学生がいるという今の環境はとても貴重だと思っています。そのため、この機会を無駄にしないように自分から積極的に話しかけ、また、聞きたいと思ったことはメモして日常会話だけではなく、お互いの価値観を共有できるような深い話ももっとしていきたいと思います。話すたびに新しい発見があるというのはとても新鮮で不思議な感覚です。相手の価値観や考え方を否定せず柔軟な心で相互理解ができるようにこれからも交流を続けたいと思います。

文大に着任するにあたって

着任のご挨拶

国文学科　特任教授
田中　均

自宅のある東京方面から中央道を西進して都県境を過ぎるころから山の緑が色濃くなってきます。新緑萌え出ずる５月、木々の緑にもさまざまな色合いがあることに目を奪われてしまいます。上野原を過ぎるとフロントガラス越しに大きく富士山が飛び込んできて、気高い姿が心を動かします。国文学科の特任教授として着任して２か月が過ぎました。通勤途中の風景が、都市部での生活にすっかり慣れた私に季節を感じることのできる豊かな時間を演出してくれています。

都立高校国語科教員を皮切りに、都教育委員会指導主事、国立大学２大学（山口大学、島根大学）教員、都内私立学校法人理事／小学校長と、小学校から大学まで、教員、管理職、理事職と多様な職を経験して今年度着任いたしました。とはいえ、久方ぶりの教壇です。学生の皆さんの授業での教員に対する注視力の高さに支えられながら、自分の職歴を今一度総ざらえしつつ国語教育の研究と高校国語科教員の養成に力を尽くしてまいります。いろいろとご指導いただきましたら、これに過ぎる喜びはございません。どうぞよろしくお願いいたします。

国際交流の活動にも取り組んできました。オーストラリア・タスマニアのファーンスクールでの海外研修に児童を引率した際の記念写真です。

「世界文学」でも／だからこそ、書かれ・読まれた時や場に目を向けよう

英文学科　講師
加太 康孝

文学部英文学科に世界文学担当教員として着任しました、加太（かぶと）と申します。

このように始めると、すぐさま言い訳を添えたくなります。文字通りに「世界文学が専門です」という研究者はいない（はずだ）、と。近年、世界文学という言葉を冠した書籍や講座が多く見られますが、それらの著者、担当者は例えば「20 世紀ロシア文学」など特定の地域、時代の文学を専門とし、そこから「世界文学」に接近しています。

私の場合、20 世紀前半のブリテン諸島の文化が専門です。ブリテン諸島というのはアイルランド、イギリスという独立した、しかし地理的、文化的結び付きの強い二国をひとまとまりの地域と見る言葉です。現在の英文学研究では、「イギリス文学」「アメリカ文学」の二分法を全く無反省に用いることはさすがに減ってきていますが、それでもアイルランドの英語文学が無頓着に「イギリス文学」に含められることは珍しくありません。かと言って、両地域の文化的な重なり合いを考えれば、単純に「アイルランド文学」を切り離せば済むわけでもありません。この小さな地域を見るだけでもすでに、「世界文学」へのきっかけがあります。

世界文学とは何か。論じている紙幅はありませんが、ひとつ言えることは、それは個々の地域、時代に応じた複数形で現れるということです。その中には、21 世紀の都留から考える世界文学も数えられます。壮大な概念だからこそ地に足を付けて、学生のみなさんとともにじっくり向き合っていきたいと思います。

「世界文学」のひとつ、ジェイムズ・ジョイス『ユリシーズ』の舞台ともなったダブリン（アイルランド）は何度も訪れました。写真は『ユリシーズ』最初の場面となるマーテロー塔からの眺め。

英語教育における「テスト」について一緒に考えていきましょう

英文学科　講師
黒川 智史

文学部英文学科に第二言語習得の担当として着任いたしました黒川智史です。主に、テストの妥当性、信頼性の検証、および大学入学試験における英語科目の政策について研究しています。

最近では、国は共通テストの枠組みに、英語民間試験を導入しようとしていましたが、ご存知のとおり、テストの妥当性や採点、そして運用の困難さ等から断念されました。その中で特に議論の中心となっていたのは、スピーキングテストの運用方法でした。その意味では、スピーキングテストと国の入試政策は関係していると考えられるでしょう。しかしながら、スピーキングテストは、導入が断念された大学入試だけでなく、小中高の定期テストですらスピーキングを評価する基盤が整っているとは言い難いのが日本の英語教育の現状です。

文大生は、小中高の教員になる方が非常に多いと聞いております。その場合、将来スピーキングテストを定期テストにおいて作成し、それを評価しなくてはならない可能性も十分に考えられます。実際にご自身が定期テストを作成する前に、少しでも役立つような知識や評価方法を、私の授業を通して学んでいただければと思います。また、ゼミではスピーキングテストや国の入試政策についての最新の論文を読んで、一緒に勉強していく予定です。これからどうぞよろしくお願いいたします。

オックスフォード大学ラドクリフ・カメラ前にて撮影

越境の学び、学びの越境

比較文化学科　教授
青木　深

2022年4月に文学部比較文化学科に着任しました、青木深です。歴史学と文化人類学が重なり合う領域で、日本とアメリカ合衆国の音楽や芸能に着目しながら、人や文化の越境的な歴史と記憶に分け入っていく仕事を続けています。21世紀とともに開始した研究は拙著『めぐりあうものたちの群像――戦後日本の米軍基地と音楽 1945-1958』（大月書店、2013年）にまとめましたが、ここ数年は、戦後に来日した米軍将兵がアメリカへ持ち帰った日本のポピュラー・ソングの「その後」を辿る研究と、19 世紀末から 20 世紀初めにアメリカのサーカスやヴォードヴィルで活躍した日本人軽業師の研究を並行して進めています。本学に着任する前は、一橋大学で 6 年間、東京女子大学で 6 年間ほど大学教育に携わり、「日米比較研究」などの講義や演習を担当してきました。着任後は「表象文化論」や「日本文化・社会論」などの講義と演習を担当します。学生の皆さんには、人間の不完全さや不思議さに粘り強く付き合っていける〈あたま・こころ・からだ〉を磨き、「学び生きる」時間を充実したものにしてほしいと思います。そのために私も力を尽くします。着任してから2か月がたち、緑も濃くなってきました。春夏秋冬、そして次の春へ、都留の山がどんな風景を見せてくれるのかも楽しみです。よろしくお願い致します。

バーナム・アンド・ベイリー・サーカスにおける日本人軽業一座のポスター（1891 年）
ロバート・L・パーキンソン図書館／研究センター所蔵（2019 年 8 月 24 日、筆者撮影）

世界と地域への多角的な学びを目指して

比較文化学科　講師
上野 貴彦

2022 年 4 月に比較文化学科のエスニシティ論担当として着任いたしました、上野貴彦と申します。専門は移住・グローバル化の社会学で、地域のなかの多様な住民が、さまざまな葛藤を経験しつつ平和的な「共存」や「共生」を模索する過程と、そこで公的機関が果たす役割に関心を持っています。そして、スペインの少数言語文化地域であるカタルーニャやバスクで、とりわけ 21 世紀に入ってから増加した国際移住者が増加するなか、住民と自治体政策の関係がどう変化してきたのかについて現地調査を重ねてきました。また、欧州における国境の変容や、コロナ禍における南ヨーロッパの福祉国家と女性移住者の包摂と排除など、広く物理的・制度的な「境界」の社会学的分析にも取り組んでいます。

ウクライナでの戦争を受け、日本でも平和創出や難民受け入れ、そして欧州への関心が高まっているように感じます。これを一過性のものとせず、身近な地域を含む世界の平和、国境と移住などをめぐる問題への多角的な視点を探りつづけることが、この厳しい状況でこそ重要だと考えます。都留からそう遠くない多摩地区の出身である一方で、遠く離れた南欧を知る機会に恵まれてきたことを活かしつつ、学生の皆さんと一緒に研究・教育に励みたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

地中海での難民救助を訴えるバルセロナ市民（2019 年 7 月）

ビジョンを描きながら歩み続ける教師を目指せ！

学校教育学科　教授
古屋 和久

学校教育学科教育実践系で教育方法を担当する古屋和久です。珈琲と珈琲時間・珈琲文化をこよなく愛する1961年生まれ、どうぞよろしくお願いします。

教師の大切な仕事に、①授業づくり、②児童(生徒)理解と関係づくり、③教室空間づくりの３つがあります。教職をめざす人はもちろん、現職の教師にとっても、この３つの世界の「良き学び手」になることが大切です。教職をめざすみなさんには、大学の４年間で、３つの世界それぞれのビジョンを描いてほしいと思います。「どんな授業をしたいのか」、「どんな人間関係を育てたいのか」、「どんな教室空間をつくりたいのか」を考え、自分の言葉にするのです。ネットで答えらしき情報を探すのではなく、自分で言葉をつくるのです。

学生のみなさんが３つのビジョンを描くために必要なことの１つめは「読むこと」です。教育に関する書籍・論文等を読みまくり、教育に関する豊かな見識を身につけてください。２つめは「見ること・聴くこと」です。教室観察、教育実習、公開研究会など、大学内外のさまざまな機会を利用して、直接・間接的に学校（教育）を「体験」してください。３つめは「対話すること」です。共に都留文科大学で学ぶ仲間だけでなく、他大学で学ぶ仲間や世界の同じ志を持った仲間たちと語り合いましょう。大学の教師はもちろん、学校現場や教育行政、社会教育の現場で生きる方々と語り合いましょう。教育方法や教育技術が生きるかどうかは、そこにどんなビジョンを描くかにかかっています。

アートが生まれる教室

出会いはタカラモノ

学校教育学科　特任教授
佐藤 比呂二

今年度から学校教育学科に着任いたしました、佐藤比呂二（さとうひろじ）と申します。東京工業大学を卒業後、昨年度まで都立特別支援学校で教諭をしておりました。知的障害校では、重度の自閉症児と関わる機会が多く、少しの思い違いでもパニックになり身の回りの物を壊してしまったり、激しい自傷をしてしまったりする子たちとの関りから多くのことを学ばせてもらいました。本人も周囲も困難な生活を余儀なくされるこうした「問題行動」の中にこそ、実は彼ら自身も気づけていない「ホントの願い」を見いだす瞬間があります。そんな「願い」をくみ取り、支えていく中、子ども達は変わっていきます。激しいこだわりや自傷にさえ自ら歯止めをかけようと立ち向かう姿から「子どもは願いによって自ら変わる存在」だと教えられました。また、病弱教育では小児がんの子ども達と関わってきました。厳しい病状の子ども達にとって、院内学級は「患者であることを忘れられる場」であり、「笑顔があふれる場」でもありました。病院で出会えた仲間同士支えあう姿からピアサポートの重要性も実感しました。だからこそ、まだまだ不十分な病弱児の教育環境を今後充実させていく必要性を痛感しています。子ども達から学んだ大切な「タカラモノ」。一つでも多くお伝えできればと思っています。よろしくお願いいたします。

あっ、あと…時々、マジシャンになります。マジシャン名は「ボブチャンチン」です。

院内学級でのマジックショー

文大に着任して

学校教育学科　特任教授
山本　剛

４月から学校教育学科特別支援教育教職課程に赴任いたしました山本剛です。どうぞよろしくお願いいたします。私は、特別支援学校に３８年に渡り勤務しました。そのほとんどを肢体不自由及び重度重複障害の子どもたちとかかわってきました。養護学校義務制後の重度化そして重複化、個別の指導計画と教育支援計画の導入、他機関との連携の広がり、医療的ケアの開始、コロナ禍への対応等、学校現場が大きく変わる時代を、「全ては子どもたちのために」との思いで走り抜いてきました。私は、肢体不自由教育を中心に指導しますが、子どもたちにかかわることの楽しさ、醍醐味、やりがい等、これまでの実践から学んできたことを、特別支援学校教諭免許状の取得を目指す学生たちにしっかりと伝えていきたいと思っています。本学に勤務して２か月が経ちますが、学生たちはとても真面目で一生懸命に勉学に励んでいるとの印象を持ちました。これからの学生とのかかわりが楽しみでなりません。私は、約４０年に渡り心理リハビリテイション（動作法）研究会で活動しています。この会は月例訓練会や集中訓練会を実施しています（写真）。現在はコロナ禍で休止していますが、活動が再開されましたら、学生たちに臨床の場を提供できるよう、声をかけていきたいと考えています。

夏季集中訓練会の参加者とともに

着任にあたって

地域社会学科　准教授
峯田 史郎

教養学部地域社会学科へ国際政治学担当として着任しました峯田史郎です。昨年度は、都留文にて非常勤講師として講義や演習、卒業論文指導を担当し、卒業生を送り出しました。山水の流れる音や澄んだ空気を感じながら、この場所で教育・研究に従事できることをうれしく思っています。

これまでの研究では、フィールドを中国西南部（雲南省）から東南アジア大陸部の国境地域に定め、国家間のマクロな視点と、国境を巧みに利用する人々の生存戦略というミクロな視点双方のアプローチに取り組んできました。特に、少数民族組織であるカチン独立軍や南シャン州軍が、地理的な条件をいかに利用しながら、ミャンマー国軍に対する闘争を継続しているのかに関心を寄せています。

実務では、技能実習生や外国人労働者、留学生の受入れの業務を経験してきました。課題の多い分野ですが、日本の中小企業の現状や、地域と国際社会のつながりを目の当たりにしてきたことは、現在の研究・教育へもつながっています。

都留文では、「国際社会は、いま、どう動いているのか」という好奇心、「なぜ、それが起こるのか」という原因と結果を考える力、そして、「自分には何ができるのか」という問題を解決する方法を探る力、このような「現実の把握と行動する力」を、学生の皆さんと一緒に育んでいきたいと考えています。

タイ・ミャンマー国境に近いサルウィン川支流での現地調査風景（2012年５月）

着任のご挨拶

教職支援センター　准教授
吉岡　卓

本年度より教職支援センターに着任しました吉岡卓です。専門は情報科学で、いわゆる人工知能といった分野を研究しています。

ところで、人工知能とはなんでしょうか？例えば、地球の周りを回っている月のことを衛星と言いますが、これを人工的に作ったから人工衛星と呼ばれます。つまり、私達は衛星を知っているからこそ惑星の周りを周る人工物を人工衛星と呼んでいます。それでは人工知能とは、知能を人工的に作ったという事になりますが、そもそも知能とはいったい何でしょうか。私は知能を見たこともありませんし、触ったこともありません。元が分からない物を人工的に作ったと言っても、それこそ意味が分かりません。

実は情報科学の研究者は人工知能という言葉を使わず、知識情報処理といった言葉を使う事が多いです。曖昧な言葉に惑わされず、本質な部分で議論を深めたいという思いを情報科学分野の研究者は強く持っています。

近年ではプログラミング思考という言葉が先行したこともありますが、初等教育において真に必要となる部分を教職支援センターで正しく伝えていきたい、そんな思いを強く持っています。

ちょっと堅苦しい事を書いてしまいましたが、普段はここに載せた写真にあるように、3D プリンタやレーザーカッター、また、ドローンや VR などを使って遊んでいます。是非研究室に訪ねてきて下さい。

木製ロボットにデジタル機器で心を吹き込む.
心ってデジタル？アナログ？

文大に着任して「私の志」

教職支援センター　特任准教授
鬢櫛　利和

私は、38 年前に山梨県の中学校数学教員として教職に就き、最初の 26 年間は教壇に立ち、授業や部活動などの指導を通して生徒一人一人の成長に携わるとともに、学級担任や学年主任、生徒指導主事としての立場で学校運営に携わってきました。そして、残りの 12 年間は管理職として、教職員の資質向上や学校経営等の職責に力を注ぎ、今春、教職人生に幕を降ろしました。

近年、教員の志願者数が年々減少し、教員の配置不足や質の低下が危惧されるなど、学校現場では様々な課題が山積しています。私は、長年積み上げてきた教職経験をもとに、本学の学生たちに教員としての「魅力」や「やりがい」を伝え、一人でも多くの学生が教職を志すことを願って学生たちと向き合っていきます。

また、現在は、団塊世代が抜け、社会全体で若者たちの活躍が期待されており、学校現場においても大卒の若手教員が即戦力として学級担任等の役割を担うことが求められています。本学の学生が、卒業と同時に学校現場に出て、自信をもって子どもたちと向き合えるような実践的指導力が身につけられるよう、教育フィールド研究や教育実習指導等の授業に、本学教員としての使命と責任をもって、全力で取り組みたいと考えています。

都留文科大学附属小学校長として在職した時の「朝のつどい」の一場面（2017 年 4 月）

在外研究を終えて

国文学科　教授　菊池有希

昨年４月下旬に渡英し、ロンドン大学東洋アフリカ学院（SOAS University of London）のJapan Research Centre（JRC）を受入先として、イギリス・ロマン主義文学の〈自然―自我〉表象とその近代日本文学に対する影響についての比較文学的研究というテーマで在外研究を行ない、今年の３月中旬に帰国しました。

ビザ申請時には、イギリスでのアルファ株の状況を見極めるため、ひと月ほど渡英の時期をずらさざるを得ず、渡英後も、ロックダウンの解除と入れ替わるようにデルタ株が蔓延し出して行動に心理的規制がかかるなど、やはり少なからずコロナ禍に振り回された一年となりました。ですが、そうした中でも、イギリス長期滞在の利を活かし、日本では閲覧の難しいジャーナルや資料を傍らに置きつつ、イギリス・ロマン派詩人の作品を丁寧に精読する時間を持てたことは、大変有意義なことでした。また、作家・詩人たちのゆかりの土地に赴き、そこに残された彼らのさまざまな痕跡を作品と対照させつつ確認できたことも、得難い経験となりました。特に、湖水地方と北イングランドのハワースのローカルライブラリーでは、ワーズワースやラスキン、エミリ・ブロンテらの文学と地誌との関わりに関する禁帯出の貴重な文献・資料を閲覧することができ、新しい着想を得ることができました。11月には、JRC所長の先生の企画で、他のVisiting Scholarの先生方との研究交流会の場が持たれ、各自の研究内容についての報告を行ないました。

帰国時には、戦争まで勃発し、予定していた便が出国直前でキャンセルされるなど、最後まで世の中のままならなさに右往左往させられた一年ではありましたが、学生・院生時代に留学の機会を持ち得なかった自分にとって今回の在外研究は、大変貴重な機会となりました。学び得た知見を今後の研究・教育の中で活かしていきたいと考えています。

バイロンが第６代男爵となった10歳の時に相続したNewstead Abbey（ノッティンガム）。館内はバイロン関連資料を展示。

ワーズワースが妹ドロシーと共に生活した旧宅Dove Cottage（湖水地方）。Wordsworth Museumが併設。

コロナ禍の宅内研究報告

国文学科　教授　古川裕佳

昨年前期に学外研究の機会を得て、東京大学大学院にお世話になった。とはいえ東大に行ったのは研究発表の機会をいただいた一回だけ。図書館や資料館も入館制限があり、ほとんど宅内での研究生活となった。学外研究を申請したのはコロナという言葉も無かった頃で、その時の期待に比べれば寂しいものではあるが、得られたものについてご報告する。

まずは継続的に研究している志賀直哉について、〈移動する女性像〉に関わる資料の再検討を行ううち、〈移動する男性像〉が気になりだした。そこで、恩師の安藤宏先生のゼミで、「志賀直哉が「無邪気な若い」文学者だった頃」という題で、明治期のサラリーマンの通勤風景について報告を行った。これらについては論文にまとめる予定である。

また、これまでの授業について、コロナ禍でのオンラインやオンデマンド授業に適用可能にしようと思い立ち、配付資料やテキストのデータ化を行った。全く地味な作業であるが、コピーして切り貼りという原始的な方法で作っていたプリントを読み直すことを通じて、授業のあり方について考えることが出来たのは良かった（かもしれない）。

写真は別のエピソードである。家に閉じこもって、家族と話す以外は黙々と作業していた中、楽しみは犬の散歩であった。都内にもタヌキがいると聞いていたが、遭遇したときには「あなたは犬なの？タヌキなの？」と思わず話しかけてしまった。また、家の前の花水木にメジロが営巣しているのを発見し、大きくなってゆく雛の声と絶え間なく餌を運ぶ親鳥を眺めて楽しんだ。このちょっとした動物観察は人間社会から孤立した学外研究生活を支えてくれたように思う。愛犬と家族に感謝したい。

感謝と言えば、授業については非常勤の先生方にお世話になることができた。とくにゼミをご指導下さった高橋龍夫先生にはお礼申し上げたい。一方、学務については国文学科の先生方に分担していただかざるをえず、ご負担をおかけした。今後お返ししてゆきたいと思っている。

玄関先で飛行練習するメジロの雛

犬に驚きつつ逃げようともしないタヌキ

民博と沖縄で基礎研究に勤しみました

比較文化学科　教授　山 本 芳 美

後期に学外研究を控えた2021年4月ごろ、台湾は世界で唯一コロナ禍を逃れており、渡航を控えた私は、毎日中国語の復習に勤しんでいました。ところが感染が広がって渡航できなくなり、2019年に一度閲覧したことがある国立民族学博物館の小林保祥（1893 ～ 1984）アーカイブスの閲覧申請をし、11月に再許可をいただきました。小林が1910年代後半から1938年までに撮影した1454枚の写真には、居住した台湾南部パイワン民族の集落の日常生活、生業、儀礼の諸相が組み写真で残されていました。文章アーカイブも精査したところ､撮影メモと未刊行原稿の束があり、写真と照らし合わせて被写体や場面を同定しました。最初は手探り状態でしたが徐々に手ごたえがあり、計3回の訪問で17枚以外はすべての写真に解説がつけられました。

同館の野林厚志教授に、作成した資料について相談したところ、台湾の国立歴史博物館と民博が2022年より3年計画で共同開発する写真データベースに小林の写真を加えてもらえました。現在の技術はモニター内の写真の撮影地点をGPSで示すこともできるそうで、中文・英文訳をつけたデータベースづくりに期せずして関わることになりました※。

また、沖縄でも基礎研究をおこないました。今から約40年前に沖縄女性の手のイレズミ（ハジチ）について各教育委員会で85歳以上を対象に悉皆調査がおこなわれました。12月と3月に沖縄本島各地の教育委員会の協力を得て調査原票を閲覧して、1000名以上が協力した世界最大規模のイレズミ調査であったことが確認できました。5月にはアメリカの博物館に道具が収蔵されていたことが判明していたので、ベテランの彫師さんの協力を得て、ハジチの道具と技法を分析・復元しました。並行して米軍基地周辺の沖縄市や金武町などで、戦後のタトゥー業がいかに定着してきたかについての聞き取り調査を実施しました。

以上、普段できない研究がおこなえた半年間となりました。ありがとうございました。

宮城島から臨む「ちむどんどん」のロケ地

※科研費JSPS20H04583、20H01411、都留文科大学学術研究費に加え、3回目の閲覧は日本台湾順益原住民研究会の研究費を使わせていただきました。記して感謝します。

沖縄市ゲート通りのタトゥースタジオから

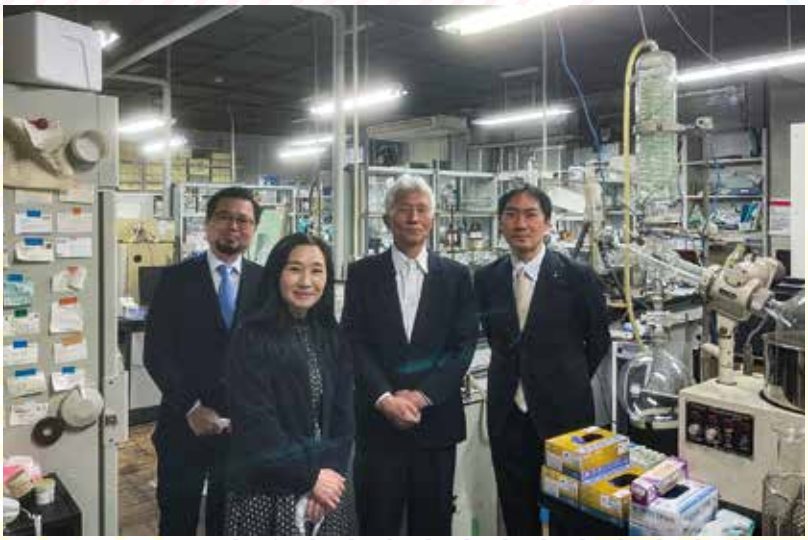
読谷村ユンタンザミュージアムの協力で
ハジチ調査原票を閲覧した

実験三昧を終えて

学校教育学科　准教授　平　和香子

昨年度学外研究の機会をいただき、東京大学農学部の水圏天然物化学研究室で公立大学研修員として一年間を過ごすことができました。当時は緊急事態宣言下だったため、通勤にも緊張感がある日々でしたが、研究室内では毎日の様に行われる有益なディスカッション、全て英語で行われるゼミや成果報告会など、学生の皆さんと共に机を並べ、それぞれの研究を探求するために必死で学び、科学と真剣に向き合う姿から多くを学ばせていただきました。そして、学生時代より十数年ぶりに松永茂樹先生、岡田茂先生の元で再びご指導をいただくことが叶うという、貴重で尊い時間を過ごすことができたことが自身にとって何よりの大切な宝物となりました。

この学外研究を行うにあたり研究テーマとしたのは、「二枚貝由来の抗腫瘍性物質の探索」というものです。つまり、貝の成分から抗がん剤になるような物質を探そうという研究です。貝は不思議な生物で、何と免疫系を持っていません。免疫がなければ様々な病気にすぐかかってしまいそうですが、その代わりに血球や細胞、酵素などが貝自身を守ってくれています。こうした特殊な生体防御機構が成り立っている貝類の中でも、私はホンビノス（*Mercenaria mercenaria*）という貝に興味を持ち、実験サンプルに選びました。この貝は少し汚れた海水中でも生育できる特徴があり、その強さの秘訣は血リンパ液にあるのではと考えました。そこで、子宮頸がん細胞を培養し、細胞に対する細胞毒性を指標に精製を行ない、そこから化合物を単離して、化学構造を決定することを目指しました。本研究が実を結ぶのは暫く先のことになると思いますが、今後の自分の研究に於いても重要な芽生えを見つけることが出来たのではないかと思います。最後になりましたが、この機会を与えて下さりサポートして下さった学校教育学科の先生方を始めとした皆様に、心より感謝の意を表します。



お世話になった先生方と

2022年度入試を振り返って

入学センター長　新井　仁

2022年度入試、志高く本学への進学を希望する学生の確保を目指して参りました。その具体について、以下ご報告致します。

長期化するコロナ禍にて地元志向の学生が増える中、本学志願者は3839名に至り、過年度より82名増でした。18歳人口が減り、高等学校の統廃合も進む状況にありながら、志願者増となったことは大変嬉しいことと受け止めております。

推薦による入学者は408名で過年度より23名減となりましたが、全入学者の50.7％で適正な人数確保となっています。これに伴い、一般選抜（前期・中期）で若干多い入学者の確保を試み、募集定員730名に対して805名（留学生含む）、定員の1.103倍の入学者を得るに至りました。学校推薦型選抜に出願する学生は本学が第一志望です。そのため、今後学校推薦型選抜への出願者が増えることを期待したいところです。一方、大学入学共通テストに向けて幅広く学んできた学生にとって、一般選抜が狭き門となることは受験生の敬遠を招く可能性もあります。このことを大切に考え、次年度以降の入試のあり方を検討することが必要だと思います。

18歳人口の減少により、全国の大学で学生の確保が難しい課題になることは否めません。また、教員という職業に対しネガティブな印象もありますが、本学ではより現場に即した教員養成でネガティブな印象を払しょくするとともに、多様な場所で活躍できる人材を輩出することで逆風を跳ね返したいと思います。魅力ある大学づくりを目指すと共に、卒業生の社会での活躍により本学への期待が高まり、次年度以降の志願者確保に繋がることを期待しています。

2022年度　学校推薦型選抜試験状況

学科名		受験者数	合格者数
文学部	国文学科	172	69
	英文学科	58	42
	比較文化学科	59	46
	比較文化学科（共通テスト利用）	33	24
	国際教育学科	34	25
	国際教育学科 (IB)	3	3
	国際教育学科（共通テスト利用）	13	3
教養学部	学校教育学科	178	93
	学校教育学科（共通テスト利用）	62	25
	地域社会学科	115	60
	地域社会専攻（共通テスト利用）	24	13
	地域社会学科（活動評価）	11	8

2022年度　前期日程入学試験状況

学科名		受験者数	合格者数
文学部	国文学科	96	43
	英文学科	45	35
	比較文化学科	118	63
	国際教育学科	24	18
教養学部	学校教育学科	105	58
	地域社会学科	108	69

2022年度　中期日程入学試験状況

学科名		受験者数	合格者数
文学部	国文学科	340	93
	英文学科	213	93
	比較文化学科	228	100
	国際教育学科	29	11
教養学部	学校教育学科	255	95
	地域社会学科	211	93

昨年度の就職状況を振り返って

副学長（兼キャリア支援センター長）
田中昌弥

令和４年３月本学卒業生774名の就職率（就職者／就職希望者）は、96.1％でした。厚生労働省と文部科学省の調査による全国の大学卒業者の就職率は95.8％だったので、ほぼ同水準と言えます。学科別では、初等教育学科、英文学科、社会学科（環境コミュニティ）、国際教育学科、学校教育学科、地域社会学科では男子、社会学科（現代社会）と国際教育学科では女子の就職率が100％でした。国際教育学科は、昨年度の第一期生に続き、２年連続100％だったことになります。また、「就職しない」と答えた本学卒業生のうち、大学院進学や科目等履修・留学等によって学び続ける道を選んだ人は、昨年よりも20％余り増加し、52名でした。

やや気になるのは、男子の就職率が昨年３月卒の96.7%から98.4%へと上昇したのに対し、女子は、昨年の99.5％から94.8％へと下がったことです。この数値の背景には、「就職しない」と答えた女子が、昨年から今年で40名から９名に減る一方、５月１日現在で就職活動を続けている女子が２名から23名に増えたことがあります。個別の事情は様々でしょうが、コロナ禍による経済の低迷の下、就職希望者は増えても、満足する結果に到るには厳しい状況があるようです。

在学生の皆さんは、こうした状況を認識しつつ、就職活動に励んでください。また、本学のキャリア支援センターは、卒業後も就職活動の支援を行っています。遠慮なく足を運ばれ、希望の進路をかなえられることを願っています。

就職先一覧はホームページに掲載

表１　令和３年度の就職関係データ

	３年度
卒業者数 A	774
就職希望者数 B	684
就職決定者数 C	657
大学院等進学者数 D	44
就職率 C/B × 100	96.1
進路決定率（C + D）/A × 100	90.6

就職決定者内訳	
企業	373
教員	182
公務員	102

表２　令和４年３月卒業者（前期卒を含む）の就職先別人数

A

教員		
	小学校	118
	中学校	24
	高等学校	20
	特別支援学校	6
	私立学校	14
	教員合計	182

B

公務員		
	国家公務員	26
	地方公務員	76
	公務員合計	102

C

民間企業		
	農業・鉱業	1
	建設業	3
	製造業	34
	電気・ガス熱供給業	2
	運輸・郵便業	14
	卸小売業	68
	金融保険業	34
	不動産業	12
	サービス業	141
	情報処理	64
	合計	373

D

公立学校都道府県別採用数（臨採含む）				
	青森県	2	岐阜県	3
	岩手県	2	静岡県	11
	秋田県	1	浜松市	2
	山形県	4	愛知県	3
	福島県	5	三重県	2
	茨城県	7	大阪府豊能地区	1
	栃木県	3	和歌山県	3
	群馬県	3	鳥取県	1
	埼玉県	6	岡山県・岡山市	6
	千葉県・千葉市	4	広島県・広島市	1
	東京都	15	山口県	1
	神奈川県	2	徳島県	2
	横浜市	10	愛媛県	4
	相模原市	3	高知県	1
	新潟県	1	福岡県	1
	新潟市	1	北九州市	0
	富山県	4	佐賀県	1
	石川県	4	長崎県	1
	福井県	2	鹿児島県	1
	山梨県	30	沖縄県	2
	長野県	12	合計	168

2021年度「授業についての学生アンケート」の結果から

学長補佐（評価担当）
（兼 FD 委員会委員長）　春日由香

昨年度（2021 年度）に引き続き、本学の FD 委員会委員長を務めております学校教育学科教員の春日由香です。本稿では、昨年度（2021 年度）に実施された「授業についての学生アンケート」の結果を総括し、コメントを述べさせていただきます。

授業アンケートについて

「授業についての学生アンケート」は、本学における授業の内容の改善・向上を目的として、毎年度の前期末および後期末に授業時間の一部を割いて、受講生に質問項目に回答してもらう形で実施しています。この授業アンケートは、すべての授業担当者（専任・特任教員、非常勤講師）に必ず 1 科目以上実施するようにと依頼しています。なお、2021 年度は、前期が一部の授業において遠隔授業と対面授業、後期は主として対面授業という状況でした。なお、昨年度よりこのアンケートの回答・提出は、ＷＥＢにて実施しています。

授業アンケート実施率

表 1 は、授業アンケートの教員の実施率を示したものです。2020 年度は、専任・特任教員の実施率が 83.4％、非常勤講師の実施率が 66.2% という低い数字でした。しかし、コロナ禍が続く状況下であったにも関わらず、昨年度（2021 年度）のアンケート実施率は、専任・特任教員が 92.6％、非常勤講師の実施率が 82.6% という 2019 年度と同等レベルまで回復しました。今後も、全教員に対してアンケート実施について周知徹底を行い、100％実施を目標にＦＤ委員会として取り組んでいきます。

表 1

（実施率％）

実施年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度
専任・特任教員	96.4	92.4	83.4	92.6
非常勤講師	84.2	86.9	66.2	82.6

表 2　2021 年度前期　全体集計結果表

項	設問文		全体平均	回答率 5	4	3	2	1		無効回答
B	あなた自身の授業への取り組みについて	セクション平均点	3.99	とてもそう思う	ややそう思う	普通にそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない		
1	あなたはこの授業にどの程度出席しましたか。100％を 5、80％程度を 3、10%以下を 1 とし、5 段階評価で答えてください。		4.46	60.98	25.02	12.79	1.16	0.05		21
2	事前にシラバスを読み、授業の目的、目標、内容を理解して臨みましたか。		3.89	27.53	40.93	25.95	4.26	1.34		20
3	授業に出席したときは、授業に集中し、熱心に取り組みましたか。		4.19	43.32	35.20	18.95	2.36	0.18		26
4	この授業について、予習あるいは復習をしましたか。十分に行ったを 5、全く行わなかったを 1 とし、5～1 の範囲で答えてください。		3.44	17.74	30.21	36.16	9.73	6.16		28
5	授業の内容をよく理解できましたか。		3.97	30.29	41.49	23.67	4.03	0.52		17
6	あなたは授業で理解できなかった点についてどう対処しましたか。（複数回答可）			授業中に先生に質問	授業終了時先生に質問	メールで先生に質問	友達・先輩に聞いた	図書館・WEB	何もしていない	100
				12.35	13.71	3.14	50.03	43.85	0.38	7.71	
7	上記 6 で「何もしていない」と回答した人だけ答えてください。なぜ何もしなかったのですか。（複数回答可）			調べ方がわからない	質問機会が不十分	質問するのがはずかしい	面倒だから	自分一人で解決	重要ではないから	その他	49
				8.02	5.84	6.11	15.22	40.22	28.67	11.28	
C	授業の進め方について	セクション平均点	4.22	とてもそう思う	ややそう思う	普通にそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない		
8	説明の仕方あるいは指示の仕方は、理解しやすかったですか。		4.18	47.77	28.30	18.95	4.09	0.90		39
9	話し方 (声の大きさや明瞭さなど) や板書は、わかりやすかったですか。		4.26	54.97	22.40	17.55	4.24	0.84		30
10	プリント、ビデオ、教科書など教材の使われ方は授業内容の理解を助けるものでしたか。		4.34	57.35	23.03	16.88	2.22	0.52		33
11	学生の反応や理解度に応じた授業の進め方でしたか。		4.11	45.97	25.98	21.98	5.06	1.01		31
D	授業内容について	セクション平均点	3.99	とてもそう思う	ややそう思う	普通にそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない		
12	授業内容はわかりやすく整理されていましたか。		4.22	49.94	26.81	19.38	3.27	0.60		30
13	授業の内容は、知的な刺激があり、興味深いものでしたか。		4.27	52.76	25.72	18.02	2.68	0.81		28
14	授業の内容・構成は、シラバスで書かれた目標に沿っていましたか。		4.19	46.69	27.02	24.84	1.15	0.30		29
15	授業のレベル (難易度) は適切でしたか。難しすぎたを 5、易しすぎたを 1 とし、5～1 の範囲で答えてください。		3.27	2.93	25.90	67.04	3.84	0.29		27
E	授業成果について	セクション平均点	4.25	とてもそう思う	ややそう思う	普通にそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない		
16	この授業を履修したことで、この分野に関する新しい知識や考え方、技能などを修得できましたか。		4.25	47.70	32.17	17.61	2.03	0.50		41
17	この授業を履修したことで、ものの見方や興味・関心を広げることができましたか。		4.23	48.01	30.53	18.14	2.68	0.64		32
18	総合的に考えて、この授業を履修して有意義であったと思いますか。		4.29	53.90	25.63	17.20	2.51	0.77		40
F	授業環境について	セクション平均点		とてもそう思う	ややそう思う	普通にそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない		
19	クラスの学生数、教室の設備、備品などは適切な状態でしたか。		4.13	45.83	24.83	26.18	2.69	0.48		129

各アンケート項目の概観

それでは以下、表２（前期）および表３（後期）のアンケート結果を概観していきます。ここでは 2021 年度の数値を 2020 年度の数値と比較して、大きく変化した項目を中心に、明らかになったことと、推察できる原因について検討していきます。

●学生たちの授業への取り組みについて

①「授業への出席状況」は、昨年度より微減。2019 年度の数値に戻ったとも言える。

前期　4.65（2020 年度）→ 4.46（2021 年度）

後期　4.52（2020 年度）→ 4.32（2021 年度）

②「授業中に先生に質問」の数値が、増加した。これは、対面授業が戻ってきたことにより、遠隔授業の時よりも学生が質問をしやすい状況であったことが原因と考えられる。

前期　11.82（2020 年度）→ 12.35（2021 年度）

後期　14.00（2020 年度）→ 15.78（2021 年度）

③「授業内容についての理解」は、微増。遠隔授業における学習者の理解状況について、授業者はより一層丁寧に、注意を払う必要がある。

前期　3.90（2020 年度）→ 3.97（2021 年度）

後期　3.97（2020 年度）→ 4.02（2021 年度）

●授業の進め方・授業環境・授業内容について

①「学生の反応や理解度に応じた授業の進め方」については、前期に、遠隔授業だった昨年度と比べて微増。これについては、今後も授業者の課題としたい。

前期　3.98（2020 年度）→ 4.11（2021 年度）

後期　4.13（2020 年度）→ 4.16（2021 年度）

●授業成果について

①「総合的に考えて、この授業を履修して有意義であったか」という項目については、微増。原因がどこにあるのかを丁寧に分析する必要がある。これを受けて、本年度はより一層、授業改善の取り組みが行われることを期待している。

前期　4.13（2020 年度）→ 4.29（2021 年度）

後期　4.11（2020 年度）→ 4.32（2021 年度）

まとめると、「学生の反応や理解度に応じた授業の進め方」を授業者がより一層研究して、都留文科大学における学びを充実させていくための授業改善に向けて、全学的に取り組んでいかなければならない、ということが明らかになったといえよう。

最後に

本学 FD 委員会は今後も、授業環境の変化や１ＣＴ教育実践の状況を踏まえて、新たな授業評価のあり方と授業改善に向けての方策を検討していきます。受講生である学生の皆さんと関係各位におかれましては、今後もご教示とご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

表３　2021 年度後期　全体集計結果表

項	設問文		全体平均	回答率 5	4	3	2	1		無効回答
B	あなた自身の授業への取り組みについて	セクション平均点	4.01	とてもそう思う	ややそう思う	普通にそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない		
1	あなたはこの授業にどの程度出席しましたか。100%を５、80%程度を３、10%以下を１とし、５段階評価で答えてください。		4.32	50.52	32.51	15.36	1.52	0.09		15
2	事前にシラバスを読み、授業の目的、目標、内容を理解して臨みましたか。		3.95	31.50	38.19	25.50	3.59	1.21		18
3	授業に出席したときは、授業に集中し、熱心に取り組みましたか。		4.24	46.67	33.44	17.68	1.97	0.23		4
4	この授業について、予習あるいは復習をしましたか。十分に行ったを５、全く行わなかったを１とし、５～１の範囲で答えてください。		3.53	20.58	30.11	36.11	8.20	5.01		20
5	授業の内容をよく理解できましたか。		4.02	33.90	39.55	22.25	3.62	0.67		21
6	あなたは授業で理解できなかった点についてどう対処しましたか。（複数回答可）			授業中に先生に質問	授業終了時先生に質問	メールで先生に質問	友達・先輩に聞いた	図書館・WEB	先生の研究室を訪ねた	何もしていない	66
				15.78	12.84	3.54	52.68	43.10	0.56	6.31	
7	上記６で「何もしていない」と回答した人だけ答えてください。なぜ何もしなかったのですか。（複数回答可）			調べ方がわからない	質問機会が不十分	質問するのがはずかしい	面倒だから	自分一人で解決	重要ではないから	その他	26
				11.19	4.98	4.48	14.43	35.82	31.84	13.18	
C	授業の進め方について	セクション平均点	4.26	とてもそう思う	ややそう思う	普通にそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない		
8	説明の仕方あるいは指示の仕方は、理解しやすかったですか。		4.23	50.34	27.77	17.49	3.43	0.97		21
9	話し方（声の大きさや明瞭さなど）や板書は、わかりやすかったですか。		4.32	57.66	21.65	16.37	3.53	0.79		22
10	プリント、ビデオ、教科書など教材の使われ方は授業内容の理解を助けるものでしたか。		4.34	57.47	22.84	17.04	1.96	0.69		22
11	学生の反応や理解度に応じた授業の進め方でしたか。		4.16	49.26	24.34	20.63	4.51	1.26		23
D	授業内容について	セクション平均点	4.02	とてもそう思う	ややそう思う	普通にそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない		
12	授業内容はわかりやすく整理されていましたか。		4.26	52.20	26.09	18.07	2.67	0.97		23
13	授業の内容は、知的な刺激があり、興味深いものでしたか。		4.31	54.76	25.46	16.29	2.65	0.85		18
14	授業の内容・構成は、シラバスで書かれた目標に沿っていましたか。		4.22	48.92	25.93	23.51	1.16	0.48		22
15	授業のレベル（難易度）は適切でしたか。難しすぎたを５、易しすぎたを１とし、５～１の範囲で答えてください。		3.29	3.21	26.79	65.96	3.51	0.53		24
E	授業成果について	セクション平均点	4.28	とてもそう思う	ややそう思う	普通にそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない		
16	この授業を履修したことで、この分野に関する新しい知識や考え方、技能などを修得できましたか。		4.26	49.51	30.25	17.44	2.16	0.65		35
17	この授業を履修したことで、ものの見方や興味・関心を広げることができましたか。		4.26	50.81	28.53	17.57	2.33	0.76		27
18	総合的に考えて、この授業を履修して有意義であったと思いますか。		4.32	56.08	24.30	16.28	2.26	1.08		26
F	授業環境について	セクション平均点		とてもそう思う	ややそう思う	普通にそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない		
19	クラスの学生数、教室の設備、備品などは適切な状態でしたか。		4.11	45.45	24.18	26.85	2.89	0.64		132

令和３年度
都留文科大学卒業証書・学位記授与式

令和４年３月22日（火）、午前10時より都の杜うぐいすホールにて、令和３年度 都留文科大学卒業証書・学位記授与式を開催いたしました。新型コロナウイルス感染症の拡大防止対策のため規模を縮小し、午前の部、午後の部の２部制で行われました。

当日、 藤田学長は祝辞で、「都留文科大学での４年間の学びと全国各地から集った仲間や教職員との語らい・活動や切磋琢磨した経験とその成果を心に刻み、それぞれの世界に羽ばたき、自信と誇りと夢を持ち続け、豊かな人生と生活を切り拓き、元気に楽しく過ごされていくことを願い期待しています。」と述べられました。

卒業生代表の山口風子さん（比較文化学科）は卒業生のことばとして、「この春から、私たちはそれぞれが選んだ道で新たなスタートを切ります。その先には、嬉しいこと・楽しいことばかりではなく、苦しいこと・悲しいことも待ち受けているでしょう。そんなとき大学での学びや思い出、苦楽を共にした仲間の存在がきっと背中を押してくれるはずです。これでさようならではありません。さらに成長した姿でまた会える日を心待ちにしています。都留文科大学の卒業生であることを誇りに、それぞれの道でそれぞれの目標に向かって励んでいきましょう。」と、佐藤香奈子さん（地域社会学科）は「新たな道を歩む上では、コロナ禍のような予測不能な社会の中、自分にとって大切な何かが奪われてしまったり、時には、自分が為す事の意義が見えなくなってしまったりと、そこには様々な葛藤や試練が待ち受けているでしょう。しかしながら、たとえ小さな努力でも、それが人の目や心に残らないものであっても、いつか花開く事を信じ、この都留文科大学での学びが今後の自分を支えてくれる事を信じ、そしてそれが、誰かにとっての希望になる事を信じ、強く前に進んで行きたいと思っております。」と力強く語られました。

今年の式典では昨年同様、本学学生歌「花のかげ」の合唱団演奏なども中止となり式典は厳粛なものとなりましたが、お互いの卒業を祝いマスク着用で集合写真を撮り合うなど、別れを惜しむ卒業生の姿が見られました。

令和３年度 学生表彰候補について

課外活動において特に顕著な成績を挙げたと認められる学生や団体、また、社会活動において社会的に高い評価を受けたと認められる学生や団体に対する学生表彰制度により、２名２団体が表彰されました。

合唱団	第74回全日本合唱コンクール大学一般職場部門・大学ユースの部において金賞・文部科学省大臣賞受賞
吹奏楽部	第69回全日本吹奏楽コンクール全国大会大学部門において銀賞受賞
錦織（にしきおり） 美香（はるか） 学校教育学科３年	第35回全国学生スキー技術選手権大会（女子の部）において５位
羽上（はがみ） 華乃子（かのこ） 比較文化学科２年	2021年９月16日に大月警察署より感謝状を受領

名誉教授の称号授与

次の教員に対し、これまでの研究活動並びに学内活動などの功績を称え、名誉教授の称号を授与いたしました。

杉本光司 教授　前副学長

杉本光司先生は、世界中の大学がコロナ禍に翻弄された2020年度から21年度の２年間にわたり、学生･教育担当の副学長を務められました。先生が教務・学生教育のリーダーとして的確に指揮を執り、気さくで公明正大なお人柄で教職員を励まし続けてくださったことが、本学が前例のない危機を乗り越える上で大きな力となりました。

また、先生は、副学長就任以前に、教員として本学に19年間在職され、地域交流研究センター長を務められるなど、都留市と大学の連携に尽力され、ICTを中心とする学生教育や「たからばこ作戦」に代表される教育実践の開発においても、長年にわたって重要な役割を果たされました。そして、先生のこうした実績は、現在工事中の第２期新棟整備にかかる国庫補助の獲得にもつながり、本学の教育と研究の充実における先生のご寄与は、副学長を退かれた後も続くことになりました。

本学発展のため多大な貢献を賜り、誠に有難うございました。

GIGAスクール構想・現場の実情とICTを活用した英語授業の実践

日　山　恵　美
むつ市立田名部中学校教諭
（令和３年度英文学科卒業生）

令和４年２月８日（火）に、英文学科英語教育研究ゼミ（三浦幸子先生担当）が主催する「英語教育オンラインセミナー」を開催しました。GIGA スクール構想の前倒しで、教育現場では、急速に進む１人１台の端末導入や、コロナ禍でオンライン授業実施を強いられるという大きな環境変化が起こっています。それらを踏まえ、「GIGA スクール構想・現場の実情と ICT を活用した英語授業の実践」について、岩瀬俊介先生（学校法人石川学園高等学校・石川義塾大学中学校）をゲストスピーカーとしてお招きして学びました。Zoom での実施でしたが、英語教員を目指す学生が 30 人以上集まりました。約 90 分間という限られた時間の中でしたが、GIGA スクール構想の基本的な理念から、授業内での ICT 機器の具体的な使用実践まで学ぶことができました。

セミナー内では、まず、未来を生きる子供たちに英語の授業を通して身につけて欲しい力を再確認しました。それらを達成するために、ICT 機器の強みを生かしてより興味深い授業や、個々の生徒に合った学び方を実現することの必要性を感じました。また、岩瀬先生から実際の授業で活用されている ICT 機器やアプリを紹介していただきました。それらを用いることでどういった学習効果が期待できるのか、またこれからの課題等も知ることができました。これまで授業内で ICT 機器を活用することは難易度が高いのではないかと不安を感じていましたが、私たちが普段の生活の中で何気なく使用している便利な情報通信技術を授業の中で応用してみればいいのだと、見方を変えるきっかけともなりました。実際にこのオンラインセミナーも、ICT 機器を効果的に活用したため、先生や参加者との「距離」や限られた「時間」といった壁を乗り越え、学びの多い有意義な時間とすることができました。まだまだ未知の部分や課題も多いですが、実際に授業内で ICT を活用して試行錯誤を重ねながら、よりよい英語教育の実践を目指していこうと思います。

岩瀬先生に質問をする参加者の学生たち

2022年度

春季オープンキャンパス開催報告

5月15日(日)、本学で初めて春季にオープンキャンパスを実施しました。これまで夏季及び秋季で実施してまいりましたが、特に総合型選抜入試や学校推薦型選抜入試での受験を考える受験生に対し、年度始めに実施することでより訴求力が高まると考え、これまでの秋季開催分を春季に振り替え、来場形式で実施したものです。

新型コロナウイルス感染予防のため、事前予約制かつ来場者数を限定し、感染対策を講じた上で実施しました。実施内容はコロナウイルス感染拡大前とほぼ同様に、大学概要説明、キャンパスライフやキャリアサポートの紹介、キャンパスツアー、学食体験等、そのほか各学科において学科説明や個別相談を実施しました（一部の学科ではオンラインでのみ実施）。また、高校行事やコロナウイルス等の都合で来場しにくい高校生への対応として、学科説明及び個別相談はオンライン通話ソフトZoomを併用して実施し、昨年度制作した模擬授業の録画動画を掲載した特別サイトを開設しました。

このような内容で開催した結果、学科説明には来場型288名、オンライン型271名、計559名の参加がありました。個別相談には、来場型58名、オンライン型17名、計75名の参加がありました。保護者説明会には152名、学食体験には92名、特にキャンパスツアーには249名の参加があり、高校生たちと案内役を務めた本学学生たちとで会話が弾んでいる様子が見られました。

アンケート結果によると、参加者の約80%が高校3年生であったことが今回の大きな特徴であったといえます。来場者は山梨県が最も多く32%、続いて静岡県、東京都からでした。本学に関する情報は、高校教員や保護者からだけでなく、進学情報サイトや本学HPを積極的に活用して得ていることもわかりました。本学に興味を持った理由は、「興味がある学部・学科があるから」といった回答が他の選択肢より圧倒的に多く、学びたい内容で本学を考えていることがわかりました。自由記述からは「雰囲気や環境がとてもよかった」「丁寧に説明してくださり、入学したいと思えました」等、実際に本学の環境を体験したことで、より志望動機が高まった感想を多く見ることができます。

初めての試みでしたが、準備・運営に快くご尽力をいただいた教職員、学生スタッフ、広報委員会の皆様、ありがとうございました。夏季も多くの高校生たちに本学の魅力を伝えたく、よろしくお願いいたします。

（広報委員長　鈴木　健大）

令和３年度県政功績者を受賞

令和４年３月 24 日（木）、令和３年度県政功績者表彰式（東京 2020 オリンピック・パラリンピック運営関係）が執り行われ、本学が県政功績者として山梨県知事から表彰されました。

【功績概要】

東京2020オリンピック競技大会自転車競技（ロード）において、本学の学生がコース沿道における競技運営のサポートを担うボランティアである「コースサポーター」として、大会運営に貢献しました。

新棟建築工事進捗状況

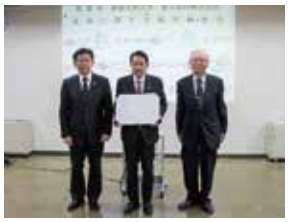
令和４年３月、新棟建築（仮称「６号館」）第Ⅰ期工事が完了し、２階には、学生・教職員はもちろんのこと地域の方々も自由に利用できるオープンな空間としてカフェコモンズを、３階・４階には、多種多様な発想が混ざり合い新たな未来が生まれる空間を目指しラーニングコモンズを整備しました。

現在進めている第Ⅱ期工事では、多目的利用を図る大教室、3D プリンター・VR・レーザーカッター・ドローン等のデジタル機器を設置したモノづくりの拠点等を整備中であり、令和５年４月供用開始に向け、開かれた大学の実現に内外から期待が寄せられています。

持続可能な地域づくりの推進に関する連携協定が締結

令和４年５月 18 日(水)、都留市役所において、富士急行株式会社及び都留市と都留文科大学の三者による連携協定書の調印式が開催されました。

この協定については、三者が教育、研究、文化等の振興、持続可能な鉄道・地域づくり、地域人材の育成などによる地域活性化の実現という共通の社会目的を有していることから、産官学連携の相乗効果を発揮させ、それぞれが有する資源を積極的に活用するとともに、知的・人的資源の交流を図り、幅広い分野で協力し、それぞれの発展と教育の充実に寄与することを期待するものです。



◀三人の写真
左から富士急行株式会社 取締役事業部 上原厚 部長（富士山麓電気鉄道（株）代表取締役社長）、都留市 堀内富久 市長、都留文科大学 藤田英典 学長

今後は、本協定締結により、本学が取り組む地域をフィールドとする教育研究活動がますます持続的に、かつ、円滑に実施されるものとなります。

タマサート大学東アジア研究所（IEAS）と基本合意書を締結

都留文科大学とタイ国立タマサート大学東アジア研究所（IEAS）は、相互の学術協力を促進するため、包括的な基本合意書（MoU）を締結しました。

研究、研修、能力開発、および研究結果の普及に関する相互に合意した分野における、都留文科大学とタマサート大学および IEAS の間の協力的な取り組みに加えて、教員、研究者、学生が将来的に相互交流をおこなうことにより、本学の国際化を教育、研究の両面から深めていくことが目的です。

（地域社会学科　教授　春日　尚雄）

調印の様子

令和４年度人事異動等について

教員

【採　用】（令和４年４月１日付）

青　木　　深（文学部比較文化学科教授）
古　屋　和　久（教養学部学校教育学科教授）
峯　田　史　郎（教養学部地域社会学科准教授）
吉　岡　　卓（教職支援センター准教授）
加　太　康　孝（文学部英文学科講師）
黒　川　智　史（文学部英文学科講師）
上　野　貴　彦（文学部比較文化学科講師）
田　中　　均（文学部国文学科特任教授）
佐　藤　比呂二（教養学部学校教育学科特任教授）
山　本　　剛（教養学部学校教育学科特任教授）
鈴　木　哲　雄（教養学部地域社会学科特任教授）
鬢　櫛　利　和（教職支援センター特任准教授）

【退　職】（令和４年３月31日付）

Evans, Hywel（文学部英文学科教授）
鈴　木　哲　雄（教養学部地域社会学科教授）
小石川　正　文（文学部国文学科特任教授Ａ）
鶴　田　清　司（教養学部学校教育学科特任教授Ｂ）
齋　藤　淑　子（教養学部学校教育学科特任教授Ｂ）
原　　まゆみ（教養学部学校教育学科特任教授Ｂ）
草　津　祐　介（教養学部学校教育学科特任教授Ｂ）

【昇　任】（令和４年４月１日付）

齊　藤　みどり（文学部比較文化学科教授）
日　向　良　和（共通教育センター教授）
Delgrego, Nicholas Dirk（語学教育センター准教授）
村　上　憲　司（教職支援センター特任教授Ｂ）

事務職員

【採　用】（令和４年４月１日付）

総務課　財務担当　主事　　飯　沼　　章
学生課　教務担当　主事　　坂　　泉　樹

【転　任】（転出）

産業建設部　部長　　齊　藤　浩　稔
理事、事務局長（兼）総合企画室長

市民部　地域環境課参事（富士・東部広域環境事務組合）
宮　下　洋　一
総務課　課長

会計課　主幹（兼）課長補佐　平　井　鉄　二
総務課　課長補佐

福祉保健部　健康子育て課　主幹（宝保育所所長）
久保田　宏　美
総務課　研究支援担当　副主幹

市民部　地域環境課　主幹（兼）課長補佐
亀　田　美　佳
総務課　庶務人事担当　主幹

産業建設部　産業課　主任　　赤　澤　勇　人
学生課　教職担当　主任

総務部　総務課　主任　　渡　邉　祥　子
総務課　図書館担当　主任

【転　任】（転入）

理事、事務局長（兼）総合企画室長
田　中　正　樹
教育委員会　教育次長（兼）
生涯学習課長

経営企画課　主幹（兼）課長補佐
三　澤　知　貴
総務部　企画課　主幹（兼）
課長補佐・つる総合戦略室長

総務課　庶務人事担当　副主査
鈴　木　さやか
教育委員会　学校教育課　副主査

経営企画課　地域交流担当　主事
杉　本　　涼
総務部　財務課　主事

【昇任・配置換】

総務課長　　横　瀬　晴　紀
経営企画課　主幹（兼）課長補佐

学生課　主幹（兼）課長補佐　上　野　　剛
学生課　教務担当　副主幹

学生課　学生担当　主査　　村　松　太　一
学生課　学生担当　副主査

総務課　研究支援担当　副主査
髙　野　裕　介
学生課　学生担当　主任

経営企画課　入試担当　副主査
青　木　敦　生
経営企画課　入試担当　主任

学生課　キャリア支援センター担当　主任
佐　藤　奈　智
学生課
キャリア支援センター担当　主事

総務課　研究支援担当　主査専門職員
髙　橋　眞智子
総務課　研究支援担当
主任専門職員

総務課　主幹（兼）課長補佐　山　本　香　栄
学生課　主幹（兼）課長補佐

学生課　教職担当　主任専門職員
関　戸　聡　子
経営企画課　地域交流担当
主任専門職員

編集後記

鈴木 健大

地方において公共交通インフラの維持・確保は、大きな課題の一つです。富士山麓電気鉄道においても沿線人口が減少、さらにインバウンド利用がコロナで蒸発してしまいました。地方鉄道といった地域のインフラに、どう沿線自治体や市民が関わり、支えていくか。この課題に対して、地方鉄道と沿線にニューツーリズムの付加価値を生み出す試みを 2019 年度から地域交流研究センター「まちづくり部門」として、富士急行、都留市と連携し開始しました。

第 1 弾として 2021 年 11 月 13 日（土）、「やまくっく・やぎちゃんと行く！秋の山ガールデビューツアー in 都留アルプスー」を実施しました。これは、沿線自治体で若年層世代の転出、特に女性の転出落ち込みが大きいことから、域外の女性に向けて都留市の魅力を発信すること、また、アウトドアブームに対する潜在需要に着目し、都留市に新たな体験価値を生み出すことを目的としたものです。さらに YouTuber である「やまくっく・やぎちゃん」を講師として迎え、インフルエンサーとしての広報を期待しました。当日はほぼ定員の 19 名が参加、ハイキングのレクを受け、山上では湧水ポークを使用したお弁当、コーヒー淹れ体験等を楽しみました。

YouTuber「やまくっく・やぎちゃん」によるツアー記録動画

このツアーは、2019 年度・2020 年度の 2 年をかけ、観光及び地方鉄道に関する基礎学習、地域分析やマーケティング、フィールド調査、他事例研究等を実施、観光ツアーを企画立案し、富士急行及び都留市にプレゼンテーションを行い、採用案をツアー商品として昇華させ、当日も学生が主体になって運営にあたったものです。都留市市民委員会の助成も受けました。当日の様子は「やぎちゃん」の YouTube チャンネルで、すでに 2 万回の視聴がされています。

今回の試行を踏まえ、2022 年 5 月、「持続可能な地域づくりの推進に関する連携協定」を三者で締結、今後もチャレンジを続けていく予定です。

ぶんだい堂

アジア経済論

小林尚朗・山本博史・矢野修一・春日尚雄編著
2022 年 3 月発行
文眞堂

◇春日　尚雄
地域社会学科 教授

戦後教育学の再検討 上
歴史・発達・人権

戦後教育学の再検討 下
教養・平和・未来

田中孝彦、田中昌弥、杉浦正幸、堀尾輝久　編著
2022 年 4 月発行
東京大学出版会

◇田中　昌弥
国際教育学科 教授

学びの質を高める！ＩＣＴで変える国語授業３
Google Workspace for Education 編

野中　潤・遠島　充・中野　裕己・渡辺　光輝 編著
2022 年 4 月 28 日発行
明治図書

◇野中　潤
国文学科 教授

身体を彫る、世界を印す
イレズミ・タトゥーの人類学

山本芳美・桑原牧子・津村文彦 編著
2022 年 6 月発行
春風社

◇山本　芳美
比較文化学科 教授
◇山越　英嗣
比較文化学科 准教授

公立大学法人
都留文科大学
〒402-8555　山梨県都留市田原 3-8-1
☎0554-43-4341
URL：https://www.tsuru.ac.jp/

都留文科大学報　第 149 号　2022 年 7 月 4 日発行

都留文科大学広報委員会
鈴木健大（委員長）・日向良和（副委員長）・加藤敦子（担当副学長）・野口哲也・加藤めぐみ・上野貴彦・Nordström, Johan Karl・加藤 優・三澤知貴（経営企画課長補佐）・安富博史（企画広報担当）・天野麻由（企画広報担当）